

予備校講師が見る共通テスト地理「身近な地域調査」 —山口県周南地域の“追い調査”を通して深みを探る

河合塾地理科講師
中土居 宏樹

センター試験時代から出題が続いている「身近な地域調査」は共通テスト地理を代表する問題の一つと言えます。国内のある地域を取り上げ、様々な資料を通して当該地域の自然や歴史、産業、社会の特徴を問うこの大問は、入試問題としての質が担保されているだけでなく、地理の面白さが濃縮された最高の良問だと個人的に感じています。そこで今回は「身近な地域調査」について、予備校講師の視点でその深みに迫ってみたいと思います。

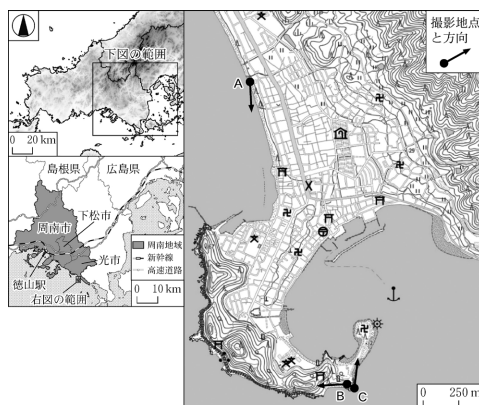
「身近な地域調査」は、2025年度から実施されている現行課程「地理総合」「地理総合、地理探究」の試験において第2問の共通問題として小問4題の構成で出題されています。解答にあたって当該地域についての詳細な事前知識は必要とされず、初見の資料をいかに正しく読み取るか、教科書的な知識を踏まえて正しく判断できるかが求められ、受験生の地理的読解力や思考力を問う問題となっています。

近年の共通テストでは全問を通して国や品目の順位判定などの知識問題が限りなく排除され、教科書的な知識と図表から読み取った情報を組み合わせて地理的に推論する力が問われるようになっていますが、「身近な地域調査」はその典型だと言えます。

個人的に特に好きな点は、そのフレームワークの秀逸さです。地域調査や場面設定の問題では、大問中にある一貫した大きなテーマが設けられており、ストーリーのように展開していく形となっています。ただのアラカルト的な小問集合ではなく、小問一つ一つが有機的に結びついて大問を構成しています。じっくり検討すると、その精緻なフレームワークに大変驚かされます。

具体的に2026年度の追試験で出題された「山口県周南地域」の問題を取り上げて見てみましょう。

問1は周南地域の全体を示した地図とその一部の地形図(右図参照)が示され、そのうちの光市の海沿いの景観写真の撮影地点を判定する問題でした。まずは周南地域の全体像を示しつつ、発展の土台とな



左上図は、色の濃い部分ほど標高が高い地域を示している。地理院地図などにより作成。

図1 共通テスト2026年追試験「地理総合」「地理総合、地理探究」第2問

った「沿岸部」にフォーカスし、後の小問に繋げていく導入の問いだと思われます。

僕は出題された地域を訪れ、出題の意図に思いを馳せながら旅をする“追い調査”を趣味の一つとしていたのですが、今年の4月にこの周南地域も訪れました。後の写真①～③はその時に撮影したもので、実際にテストで掲載された写真とはほぼ同じ画角で撮影しました。写真①は地点Aで撮影した砂浜海岸です。左手側の砂浜が奥に伸びその先に室積半島の小高い山が見えています。現地に行くと、想像以上に長くまっすぐに伸びた綺麗な砂浜でした。写真②は地点Bで撮影した半島の山地の側面で、写真③は地点Cで撮影した象鼻ヶ岬です。地図からも分かるように、室積半島は典型的な陸繋砂州(トンボロ)と陸繋島で、周辺を歩いてみても陸繋砂州にあたる低地とその先に続く山地の組み合わせが非常に分かりやすい場所でした。

ちなみに、砂州と言えば共通テスト初年度(第一日程)の京都府宮津市の地域調査が思い出されます。その問題でも展望台から撮影された天橋立の写真が使われました(写真④)。室積半島は天橋立になぞらえて「室積橋立」と呼ばれるそうで、同じ景観写真

の出題ということから、出題の類似性を感じずにはられません。

さて、地点Bと地点Cは、地形図中に地図記号がある記念碑をさらに奥へと進んだ先の小高い岩の上が撮影地点となっていました。麓から山地に入り、急な坂といくつもの分岐が続く遊歩道を迷いながらも進むこと数十分、ようやく辿り着いた地点Bからは瀬戸内海を一望でき、心地良い海風と潮の香り、波の音に疲れも吹き飛びました。出題者の方も同じく大変な山道を進み、ここに辿り着き、撮影されたんだなと考えると勝手ながら親しみを覚えました。そこから少し下の岩に移動した所が地点Cでした。象鼻ヶ岬の先端を撮影するには最も良い高さで角度だなど、現地に行き強くなりました。

問2は周南市中心部における新旧地形図の読図問題で、当該地域が臨海工業地帯(周南コンビナート)として大きく発展するとともに、市街地が拡大したことにフォーカスした問いです。この問いを通して受験生に当該地域の産業と歴史に目を向けさせる狙いがあると思われます。問題では埋め立てによる工業地帯の拡大、市街地の拡大、混雑緩和というバイパス建設の目的について問われました。なお、正解となった「市役所の移転の有無」はセンター試験地理Bの2015年度、2012年度の追試験など、新旧地形図の読図問題では何度も出題されている定番の内容です。それほど市街地の変化を考える際の顕著で分かりやすい事例だということでしょう。

問3では周南地域を代表する基盤産業である工業にさらにフォーカスして、どういう地域とどういう品目を取引しているかが問われました。「沿岸部」の「工業地域」という地域の中心軸に沿って、次第に問いが深まっていくのがよく分かります。

最後の問4では、周南地域の人口増減と医療機関の分布、交通網、地域内の各市の人口推移を示した資料をもとに、図の読解と理解が求められました。当該地域の課題を浮き彫りにしつつ具体的な対策(取り組み)を取り上げることで、受験生に地方の中小都市が抱える問題に目を向けさせる狙いがあると思われます。問4を通して、交通機関

が充実している沿岸部への人口の偏りと内陸部の過疎化、それに即した医療機関の分布の偏りが明らかとなり、沿岸部(人口集中地)と内陸部や島嶼部(過疎地)の医療格差の実情について問題提起されています。実際に現地に行くと、主要道路に沿って大きな病院はいくつもありましたが、内陸側にはほとんど見られませんでした。ただ、問いのなかではそうした実情に対応して巡回診療所が開設され、医療サービスの均質化を図る取り組みが紹介される形となっており、ネガティブな側面に終始するものではないことにも注目したいです。

このようにじっくり見てみると、当該地域の自然や歴史、産業、社会について、テーマに即して深めていく「身近な地域調査」のフレームワークの秀逸さが改めてよく分かります。他の年度の問題でも同様で、その地域を代表する特徴を捉えて、そのテーマを軸に過去から現在へ(時間)、全体から具体へ(空間)という時空間の両面から大問を構成しようとする方針が明確に読み取れます。こうした意図を理解し問題を吟味・分析することは、自身の地理の見方や考え方を養うと同時に、これからその問題を受験する生徒を指導する際にも利するに違いありません。僕自身、今後もこの大問には特に注目して、その奥深さを引き続き探究し、受験生への指導に役立てていきたいと思っています。

さて、2027年度ではどの地域がどのようなテーマで扱われるのか、今から楽しみで仕方ありません。



写真①



写真②



写真③



写真④